

具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について

當眞 翔一
(沖縄県立博物館)

On Chinese old coin, so called Meitosen, excavated from the cave
near by Gusichan Gusuku
Shiichi TOMA

(Okinawa Prefectural Museum)

1、はじめに

1995年10月、読谷村で古物商を営む西銘悦子氏から、「米国人の知人が明刀銭らしい遺物を洞穴内から発見し所有している」との情報が筆者のもとに寄せられた。早速、西銘氏を介してその米国人と会い、発見した明刀銭を見せてもらうことにした。第1図(図版-7)がこの明刀銭であり、これから紹介する標品である。

発見者は、在沖米軍を退役したDave D. Davenport という元軍人である。筆者は、氏の案内により発見場所の実地踏査を行うと同時に発見した時の状況を聞くことができた。

明刀銭が発見された場所は、沖縄県島尻郡具志頭村大字具志頭小字須武座原にある琉球石灰岩の洞穴内である。

Dave D. Davenport 氏とともに発見した場所を踏査しながら、現場の確認調査を行うとともに、遺物に付着している石灰分の検証等をおこなったところ、本標品について信頼できる資料だと思われたのでここに報告しておくことにする。

2、発見から今日までの経緯と発見された明刀銭の状況について

Dave D. Davenport 氏が明刀銭を発見したのは1992年の1月頃である。

氏の話では、当時、友人数人と連れ立って沖縄戦の際の戦争遺留品を探す目的でこの洞穴に入り、金属探知機を使いながら遺留品探しをしているとき洞穴の奥壁付近で金属反応があったので約10~20cm程掘り下げたところ明刀銭が発見されたといっている。その時には標品のもつ学問的意義や価値についてよく知らなかったが、大事な遺物だと思ってそのまま保管していたのだという。

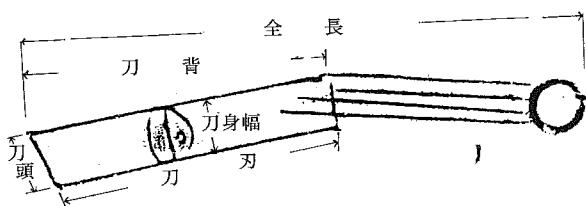
ところで、Dave D. Davenport 氏は、いわゆる文化財のコレクターではない。また、考古学の研究者でもなければ、遺跡から発掘される遺物に対して興味をもって調べている人でもない。事実、明刀銭についての知識もそう深くないようである。氏は、十数年前に在沖米軍の兵隊として来沖し、沖縄戦の状況などを知るうち戦争遺留品や戦跡等に興

味をもつようになったという。そして、沖縄の人と結婚して退役後もそのまま留まり、戦争に関する遺物を收拾しながら戦争博物館をボランティアで運営している。浦添市城間の在沖米軍基地内にある戦争博物館（註1）は、兵舎を利用した小さな展示場であるが、氏によって運営・管理されており、そこには沖縄戦の際の戦争遺留品が所狭しと展示されている。今度の発見は、そもそも戦争遺物の收拾目的だったのが偶然にこの明刀銭を洞穴の中から発掘することになったわけである。

発見された明刀銭は、青銅製品独特の青錆が全体を覆い、刀柄の中央部に僅かな撓みが認められるものの完形品であり、保存状態はきわめて良好である。よく観察すると、刀身の表と裏面に白色の物質が部分的に付着しており、裏面の銭文にも擦傷痕が僅かに認められた。発見者に聞いて見ると、白色物質については「石灰分が付着していた跡」だといい、裏面については、「文字らしいのが見えたのでそれを鮮明にするために擦った傷痕」だという弁であった（註2）。

洞穴から掘り出した時には、表・裏面ともに石灰分が付着していたとのことであるが、筆者が見たときにはすでに石灰分は落とされており、きれいな状態でクリーニングが行われた後であった。それでも、刀身の僅かな凹みや、特に刀頭の先端部分をルーペで観察すると、そこにはまだ石灰分が付着し（註3）、洞穴内から採集されたものだとという痕跡を明瞭に残していることがわかった（図版-6）。

各部分の名称については下図とおり仮称することにした。その法量については、全長
明刀銭各部の名称



13.2cm、刀身の幅1.0cm、刀身の厚み0.6cm、刀背の長さ7.5 cm、刃の長さ7.2 cm、刀頭1.7 cm、また、重量は16.2 gである（第1表）。

なお、後述する明刀銭の分類では、刀身表面の字体が㊀とあらわしたもので、刀身が、柄との接続部のところから内側に折れ曲がった形をしていて、裏面には㊀に似た数字らしいのが鋲出されていることから第3類に分類されるものである。城岳貝塚から出土した明刀銭に法量とともに類似する標品である（第1表の法量を参照）。

第1表 沖縄県発見明刀銭の法量

挿 図	標 品	全 長 cm	刀 身 幅 cm	刀 身 厚 cm	刀 背 長 cm	刀 刃 長 cm	刀 頭 幅 cm	重 量 g
第1図 図版-7	具志頭城北東崖下洞穴資料	13.2	1.0	0.6	7.5	7.2	1.7	16.2
第2図 図版-8	城岳資料	13.0	1.5	0.6	7.4	7.1	1.6	

本資料については、発見者のDave D. Davenport 氏より、遺失物法に基づいて、1995年10月4日付で埋蔵文化財発見届が那覇警察署長宛提出されている。なお、現物については、氏の了解を得て沖縄県立博物館が所蔵している。

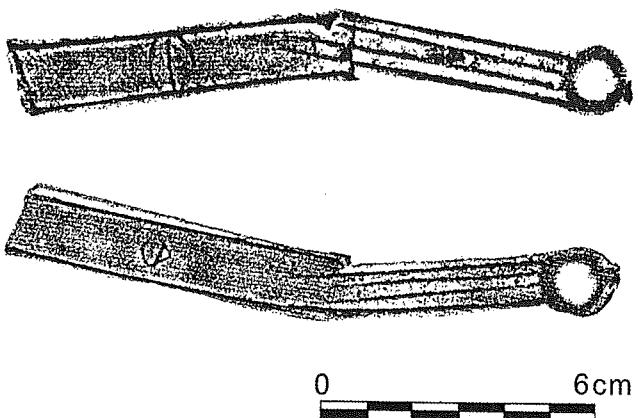
3、明刀銭の発見された場所について

具志頭村は沖縄本島南端近くの農村で、那覇市より南へ約15km、北緯26度7分、東経127度45分に位置し、村の約82%が琉球石灰岩によって覆われた地域である。地形的には海岸線に平行して険しい石灰岩堤が走り、いたるところに石灰岩洞穴が発達している。石灰岩堤が卓越する地域には古い時代の村落や遺跡が数多く分布する（註4）。

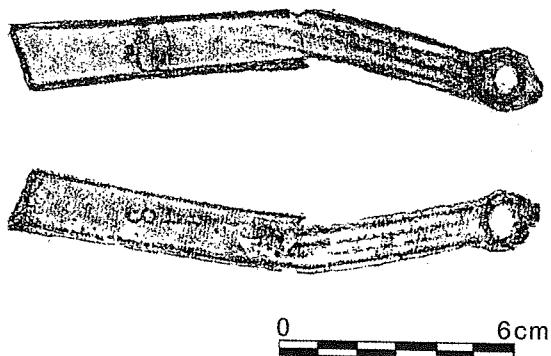
沖縄戦では激しい戦火にさらされ、現在、沖縄戦跡国定公園の一角を占めている。

明刀銭が発見された場所は、具志頭村の大字具志頭小字須武座原にある洞穴内である。この洞穴は、具志頭城の北東部崖下に形成された自然洞穴であって、標高約35mの段丘上に立地している。洞穴の道

第1図 具志頭城北東崖下洞穴資料



第2図 城岳資料



第3図 具志頭城北東崖下洞穴の位置

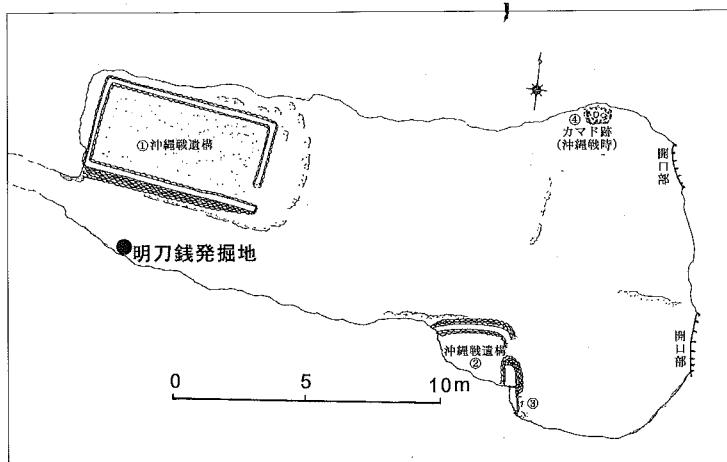


順は、具志頭集落の東南を海の方向へとのびる村道を下って行くと、やがて海の見える下り坂にさしかかる。その坂を右に廻り込みながらさらに海の方へと下っていくと道の右手（南側）に具志頭城の切り立つ断崖が見える。洞穴はその断崖の中腹部に開口し、主洞がちょうど具志頭城真下に位置する恰好となる（第3図）。

洞穴の間口は幅170cm、高さ150cmの半円形状になっていて、北東に面して開口している。洞穴入口の前には洞穴口を塞ぐようにして大岩があるために北風を遮り古代の人々が住居するに恰好の場所だったと思われる。洞穴北側の眼下には、白水川の河口が広がっており、かつては入江だったらしく古い時代には貿易港として利用されたことが具志頭村史等には見えている（註5）。現在、この白水川の河口部にはクルマエビの養殖場が操業している。

第4図は洞穴内部の概略図である。この図でもわかるとおり、洞穴内は沖縄戦のときに大きく攪乱を受けており、今でも洞内に石積みの戦争遺構が残されている（註6）。①の遺構は 6×3 mの長方形をした石積みで、内側床面には珊瑚砂利が敷詰められている。沖縄戦の遺構であることは確実であるが、何の目的で作られたものか定かでない。この石積み遺構の南側の洞壁側で明刀銭は発掘された（●印）。②は入口近くの壁よりに積まれた石積遺構であるが、周囲を石で囲み、東側の一方だけが開き石積み壁の部屋になっている。何の目的で作られた定かでない。この石積みの左側には墓の入口に類似する構築物があり（③）、現在、花や線香などが置かれていて信仰する人がいるようである（註7）。これらの石積みは全て、石組みの状態がしっかりとしており比較的新しい時代に作られた構築物と思われる。また、北側の壁側には沖縄戦時のカマドが認められる（④）。このカマドの東側約3mのところにも開口部が認められるが、よく見ると、

第4図 洞穴の内部



岩の割れ肌が新しく、近年になって開けられた開口部であることがわかる。おそらく沖縄戦の時か、あるいは遺骨收拾の際に開けられたものであろう。主洞の入口はもともと北東側に1か所だけ開いていたものと思われる。

4、明刀錢が発見された場所と周辺の先史時代の遺跡との関係について

明刀錢が発見された状況については前述したとおりであるが、ここでもう少し発見した時の状況を記しておくことにしよう。

本標品が発見された地点は、洞穴の開口部から22m奥に入ったところの壁側である。発掘者のDave D. Davenport 氏は、この地点において、金属探知機に反応があったので発掘を行ったと証言している。そして、およそ10~20cm程掘り返したところで標品が出土したともいっている。そのことからすると、標品は明らかに地中に埋蔵されていたもので、表面採集品ではなかったということになる。Dave D. Davenport 氏に案内されて現地を確認したところ、氏の証言を裏付けるかのように、実際、現地には30×20cm程の窪みができていて掘られた形跡があり、発見された地点を容易に確認することができた(図版-5)。以上のことから、この地点で明刀錢が発掘されたことは、証言どおり事実だと思われる。

ところで、この地点で確実に明刀錢が掘り出されたとしても、なお、明刀錢の出土に関して若干の不安材料が残る。それは、発掘地点の周辺や洞穴内が沖縄戦において大きな攪乱を受けたということである。この洞穴は日本軍の陣地壕として使用され、洞穴内に戦争時の構築物がある。当然、この時に、洞穴内は大きな改変を受けたであろうし、また、数百人の人々が戦時中出入りしていたという事実もあることから外部から持ち込まれたことも考えられる。しかし、戦時中という厳しい状況の中ではたしてこの種の遺物が持ち込まれる可能性があったかどうか。

さて、次に周辺の遺跡の状況について述べることにしよう。

この洞穴の上部、つまり、洞穴が開口する崖の上の台地は具志頭城が立地し、現在でも城壁等の石垣遺構がよく残されている。具志頭城は、14~15世紀の貿易陶磁器が出土するグスク跡で、伝承によれば、具志頭一帯を支配した具志頭按司代々の居城だといわれている(註8)。この遺跡からは、貿易陶磁器をはじめとしてグスク時代の土器および具志頭城式土器と称される「くびれ平底」の器形を有する土器が出土し、南部のグスクの中でも比較的著名なグスクとして知られている。ところが、近年の発掘調査でこの台地には、グスクだけでなく、縄文後期及び縄文晩期の遺跡も複合して立地していることが判明した(註9)。

1982年に実施されたグスク中央部にある展望台を建設する際の緊急調査では次のことが明らかになっている(註10)。層序は、1層が表土層、2層が小石が少量混ざる黒褐色土層、3層が礫が多量に混ざる黒褐色土層、4層が礫混じりの茶褐色土層であった。1層と2層はグスク時代の遺物包含層であるが、3・4層は縄文後・晩期の層で、伊

波・荻堂式土器から宇佐浜式土器までを出土する層である。このような層序形成の状況からすると、具志頭城の文化層は、単純にグスク時代の遺跡だけでなく、下層には縄文後・晩期の文化層が包含されていることがわかる。

では、洞穴内の状況はどうだろうか。つまり、洞穴遺跡かどうかということであるが、今回、電灯の明かりだけをたよりに調査した結果では、遺物包含層等を確認することはできなかった。しかし、貝殻や石器片、時期不明の小さい土器片等が僅かに採集できたことから遺跡の可能性もあり、本格的な発掘調査がまたれるところである。

ところで、本洞穴は、地形的に見ると古代人が生活する場として好条件の立地をしていたものと思われる。たとえば、洞穴そのものは、高い天井のホールがあり、洞穴内の床面も一様に平らになっていて、湿度も一定している。また、目の前には大きな川と入江があり、リーフの発達した海岸を控えている。これらの条件を備えた石灰岩洞穴はこの付近にはそう多くはない。したがって、明刀銭を包含する文化層の可能性もあり、この洞穴の保存措置と同時に本格的な調査が是非必要である。

この洞穴の西南西約400 mの海岸段丘下には、463点の中国貨銭が発見されたウフブリ下洞穴遺跡が知られている（第3図）。この遺跡は、1972年に中学生によって発見され、その後、1981年に遺跡の確認調査が実施された（註11）。

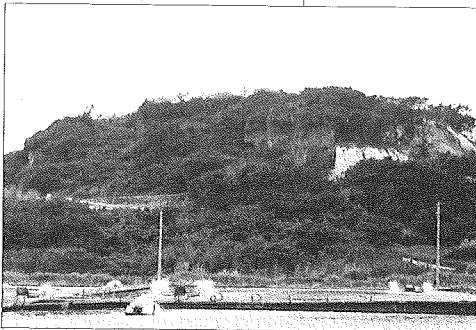
遺跡は幅約2m、高さ約90cm、奥行き約3m程の小さな洞穴である。1981年の発掘時には、洞穴内全域に中国銭

ウフブリ下洞穴遺跡出土の中国銭一覧表

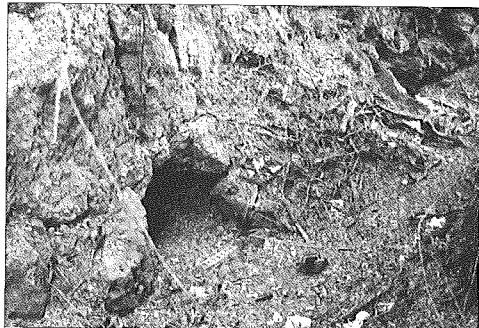
貨幣名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
	開元通寶	宗通元寶	至道元寶	祥符通寶	天聖元寶	皇祐通寶	嘉祐通寶	熙寧元寶	元豐通寶	元祐通寶	紹聖通寶	元符通寶	聖宋元寶	大觀通寶	政和通寶	大定通寶	大中通寶	供武通寶	永樂通寶	不明銭	無文銭	破片	合計		
数量	3	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	2	1	1	296	63	17	43	17	463
備考	唐高祖 武德四年	北宋太祖 興國二年	北宋太宗 至五年	北宋真宗 大中祥符二年	北宋仁宗 天聖元年	北宋神宗 熙寧元年	北宋元祐二年	元豐八年	元祐八年	紹聖元年	元符元年	建中靖国元年	北宋徽宗 大觀元年	政和元年	大定十八年	大定十九年	至大三年	至生二一年	洪武元年	明成宗 永樂六年	明太祖 洪武元年	明太祖 永樂六年	西曆一四〇八年	内破片17点	
備考	西暦 六二一年	西暦 九六八年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年	西暦 九九年		

（『具志頭村の遺跡』沖縄県具志頭村教育委員会 1986年3月より掲載）

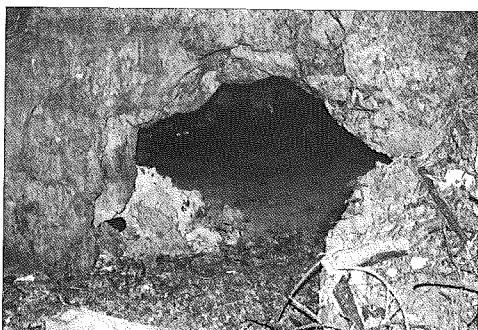
が散らばっていたということであるが、発掘を担当した人の所見では、もともと洞穴の奥に埋蔵されていたのが、「後世なんらかの理由によって散乱したものと考えられる」としている（註12）。いま、このウフブリ下洞穴遺跡で出土した貨銭を記すと左の一覧表のとおりとなる。



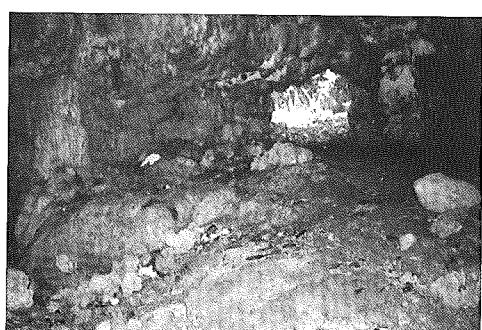
図版-1 洞穴の位置（上の台地は具志頭城）



図版-2 洞穴の開口部



図版-3 洞穴の口から内部を見る



図版-4 洞穴内の状況

5、明刀銭とその分布について

明刀銭・めいとうせんと読む。中国の戦国時代（紀元前403～221）に、おもに燕の国で流通した貨幣とされ、刀子の形をして刀身の表面に「明」の字が鋳出されていることからそう呼ばれている（註13）。中国の戦国時代は、日本の縄文後期から弥生の初頭に比定され、沖縄の土器形式としては伊波・藪堂式土器・大山式土器・室川式土器・室川上層式土器・宇座浜式・仲原式土器あたりまでを含む時期となる。

明刀銭に似て刀子の形をした貨幣は刀貨と呼び、種類としては15種前後あるとされ、形状や錢文から、古刀、尖首刀、明刀、直刀の四種類に大別されるようである（註14）。その内の明刀が明刀銭にあたる。『世界考古学体系第6巻』のなかで、金閥恕氏は次の三類に分けている（註15）。

第一類は、表面に鋳出された明の字体が彌のようになっているものである。刀背が弧状となり、刀刃の方が湾曲している。裏面には地名を記したものが多く、地名と出土地などからの検討によれば、齊、趙の国等で鋳造されたものと考えられている。

第二類は、表面に鋳出された明の字体が彌のようになっているものである。第一類に

似て刀背が弧状で刀刃の方は湾曲しているが、裏面は地名ではなく、数字やその他の記号が見られる。

第三類は、表面の字体が㊀のようになっているもので、その多くは、刀身が柄との接続部のところから内側に折れ曲がった形をしているという特徴をもつ。刀刃は幅が一様であり、柄に鋳出された二状の突線文は刀身部にとおり刀背に達している。裏面は第二類に類似して数字やその他の記号が鋳出されている。

以上であるが、その出土地域を見ると、第一類が前述したように齊と趙の国を中心としたごく限られた地域に分布している。第二類と第三類は、河北省北部から遼寧省、朝鮮半島あたりまで広範囲に分布域が広がっているようである。後述する城岳貝塚出土の明刀錢は第三類であることから遠く海を渡って沖縄まで分布していることになる。また、今回発見された明刀錢も第三類に属するものである。

なお、明刀錢の出土地については、これまで、高橋建自氏（註16）、関野雄氏（註17）、李進熙氏（註18）、西谷正氏（註19）、高宮廣衛氏（註20）、小田富士男氏（註21）等によってとりあげられてきたが、近年、上村俊雄氏によってこれらの資料が集成され明刀錢出土地名表が作成されている（註22）。いま、上村氏の作成された表を掲げて参考に資することにする。

明刀錢出土地

I 中国

1. 北京付所	明刀錢
2. 河北省何間県	明刀錢
3. 河北省易県	明刀錢
4. 河北省灤平	明刀錢・鉄斧
5. 遼寧省貔子窩高麗寒	明刀錢・鉄斧・鉄鑿・鉄鎌・鉄庖丁・鉄鋤・ 鉄鋤・鉄槍・半両錢・一化錢
6. 遼寧省大嶺屯城址	明刀錢・鉄斧・鉄槍・貨錢
7. 遼寧省營城子	明刀錢
8. 遼寧省旅順市牧羊城址	明刀錢・鉄斧・鉄刀子・鉄鎌・半両錢・五銖錢・大泉 五十・明刀円錢・一化錢
9. 遼寧省遼陽太子河付近	明刀錢
10. 遼寧省熊岳城	明刀錢
11. 遼寧省大石橋東方盤龍山	明刀錢

II 朝鮮半島

1. 平安北道寧辺郡悟里面細竹里	明刀錢・鉄器ほか
2. 平安北道鉄山郡登串	明刀錢
3. 平安北道鉄山郡榎島里	明刀錢

4. 平安北道救陽郡南薪覗面都館里	明刀錢
5. 平安北道東倉面梨川里	明刀錢
6. 平安南道德川郡青松里	明刀錢・布錢・鉄器
7. 平安南道寧遠郡溫和面溫陽里	明刀錢
8. 慈江道江界市	明刀錢
9. 慈江道慈城郡西海里	明刀錢・一化錢・半兩錢
10. 慈江道渭原郡龍淵洞	明刀錢・銅鑄・鉄斧・鉄錐・鉄庖丁・鉄鋤・鉄鍬 鉄鉢・鉄鎌
11. 慈江道前川郡前川面仲岩洞	明刀錢
12. 慈江道前川郡吉祥里	明刀錢
13. 慈江道前川郡化京面吉多洞麻仙站	明刀錢
14. 伝平安南道大同江面	明刀錢
15. 伝全羅南道康津郡	明刀錢
16. 伝全羅南道務安郡	明刀錢
III 日本	
1. 沖縄県那覇市城岳貝塚	明刀錢
2. 佐賀県唐津市	明刀錢
3. 広島県三原市	明刀錢

上村俊雄「沖縄出土の明刀錢について」『鹿大史学』第39号1991年による。

6、城岳貝塚出土の明刀錢について

沖縄県で発見された明刀錢は、今回のものを含めてこれで二枚発見されたことになる。全国的にみても日本本土での発見例がないので（註23）、沖縄県だけで二枚発見されたということはやはり特筆されなければならないだろう。

大正12年（1923）に城岳貝塚で発見された明刀錢については、現在、東京大学考古学研究室に所蔵（以下、本稿では「城岳資料」と呼ぶこととする）されているが、1992年に沖縄県立博物館で開催された『琉球王国展』の際、発見地沖縄県で初めて県民に公開されることになった（註24）。その際、筆者は、展示担当者として実物資料を直接手にとって観察する機会にめぐまれた。次に、その時のメモをたよりに城岳貝塚出土の明刀錢について述べることにする。

第2図（図版-8）の資料が城岳資料である。この資料を入れた箱の中には、遺物の登録番号と見られる「標・g 262 東京大学文学部列品室」というシールの貼られた遺物カードが付けられており、次のようなメモが5行にわたって記されていた。

大正十二年九月

沖縄県那覇市外

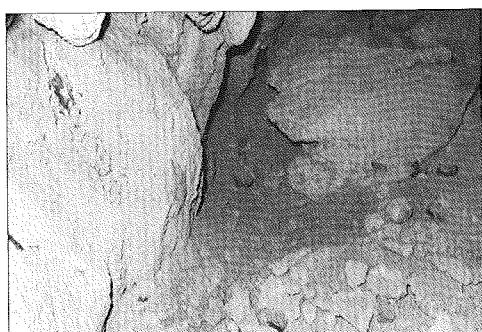
城岳（之貝塚）蹟ヨリ発掘ス

島尻郡眞和志村ニアリ（第二中季隣）

発掘者 権山資隆氏

標品は、非常に保存状態がよいものであり、青銅製品特有の青錆が全体を被っているものの付着物や傷一つない完形品である。部分名称によって法量を記すと第1表のとおりとなる。

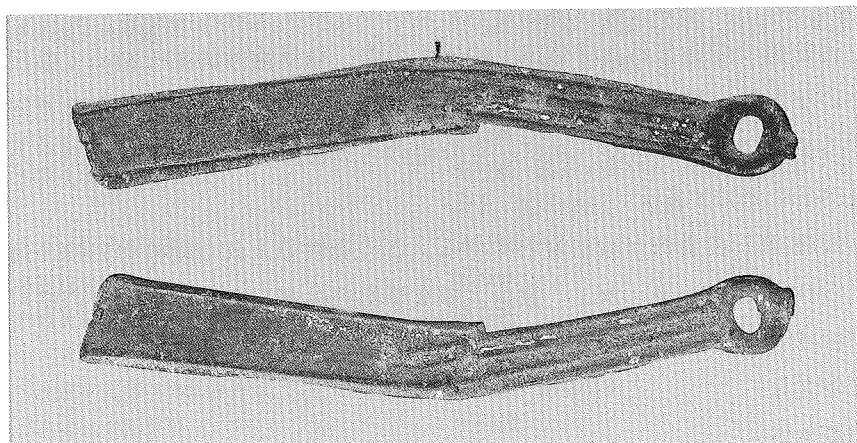
城岳資料は、那覇市の城岳貝塚で、当時那覇商業学校の生徒であった権山資隆他3人によって地表下約一尺の地中から発掘されたもので、翌、大正13年(1924)、橋本増吉によって学界に報告され、話題を呼んだ明刀錢である（註25）。その後、この明刀錢は原田淑人の希望により、当時の東京帝国大学文学部考古学研究室に寄贈され、現在にいたっている。



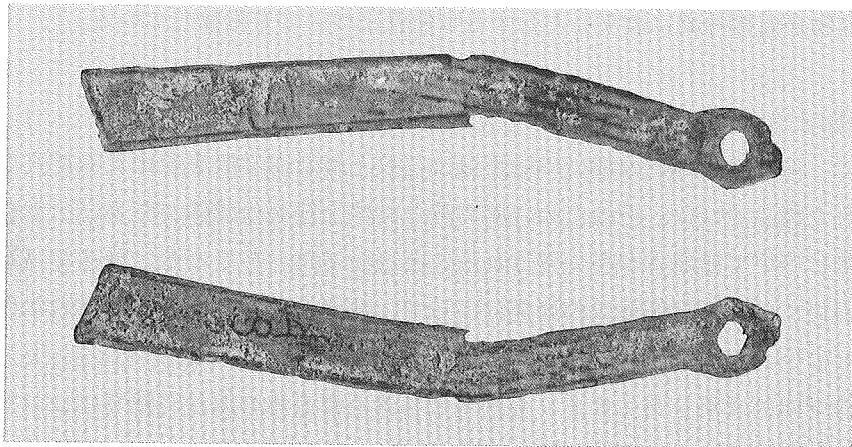
図版-5 明刀錢が発掘された地点
(掘り返された跡がある)



図版-6 刀頭に石灰分が付着した状態



図版-7 具志頭城北東崖下洞穴資料（沖縄県立博物館蔵）



図版-8 城岳資料（東京大学考古学研究室蔵）

さて、城岳資料が発掘された城岳貝塚であるが、この貝塚は、現在の県立那覇高等学校の南側約150 mに位置し、標高約32mからなる石灰岩の小丘上に立地している。戦後、採石や遊園地造成工事、あるいは那覇市の中央部に近い市街地ということもあって、現在では壊滅状態にあり、貝層の所在もはっきりしない状態である（註26）。

昭和2年（1927）に小牧実繁によって発掘調査が行われ、その時の調査成果が『人類学雑誌』第42巻第8号に報告（註27）されている。明刀錢が発見されたのは、小牧の調査から4年前にさかのぼる。発掘された当時の状況について橋本増吉は、樺山資隆から直接聞き取った話として、次のように記している。「城岳貝塚を発掘し、直径約4,5尺の穴を穿ち、深さ約2尺にして岩石に達したそうであるが、その穿穴の側壁にて表面より約1尺の所より口絵所載の明刀を発掘したのであり、同時にその穿穴地点より石鏃数個、石製の玉十数個を発掘したそうであるけれども、今は皆散逸せりとのこと」（註28）。

では、城岳貝塚とは一体何時頃の遺跡であろうか。これまでの研究では、大山式期に後続する代表的な遺跡とみなされてきた。ところが、近年、城岳貝塚から出土する土器等を検討した高宮廣衛氏は、城岳貝塚の時期を縄文後・晩期の複合遺跡であるとし、さらに明刀錢の時期についても、「縄文晩期土器との関連で捉えられるべきもの」としている。また、共伴する土器形式としては、「九州系晩期土器との関係が最も有力であろう」と考え、明刀錢の渡来経路についても、これらの九州晩期系土器とともに「九州方面からもたらされたものであろう」という見解をとっている（註29）。ところが、とくに最近、高宮氏は、沖縄の砂丘遺跡から出土する開元通宝等を検討する過程で、これら

の大陸系文物が直接沖縄に渡来したとする可能性についても指摘している。

7、おわりに

ところで、沖縄発見の明刀錢については、二枚とも考古学研究者による正式な発掘調査で得られた標品ではある。そのため、明刀錢と共伴土器との関係、および出土した文化層の時期等について疑問点が多く残されることになった。ところが、前述したように城岳資料については、高宮廣衛氏の研究によって、共伴土器との関係、渡来の年代観、渡来経路などについて、やっと一つの見通しが立てらるようになってきた。

高宮氏の学問的成果を踏まえて、今回発見された明刀錢の埋没時期等について、洞穴周辺の遺跡との関係でその感想を述べることにしよう。

今回の明刀錢は洞穴内で発見されている。洞穴の中は、頻繁に人が入るところでないので後世何らかの形でまぎれこんだとする確立は、地上の貝塚等よりはかなり低いといえよう。ただ、この洞穴の場合は沖縄戦の際、陣地壕構築による攪乱や沢山の兵隊たちが入り込めていたこともあり、その点では多くの問題点を残している。

明刀錢が発見された洞穴の上の台地上は、前述したように具志頭城が上層に乗り、その下層には伊波・荻堂期の縄文後期から弥生初頭までを含む文化層が確認されている。つまり、沖縄先史時代の前期IV・V、および後期IVからグスク時代にかけての遺跡であり、複合遺跡である。そのことから、洞穴内の明刀錢についても洞穴上の遺跡形成時に渡来した可能性はきわめて高い。では、この時期は一体何時かというと、高宮廣衛氏によって検討された城岳資料の年代観の時期が一つの目安となろう。

とはいっても、実際、洞穴内を発掘した結果ではないのであくまで一つの目安にしか過ぎない。今後、この洞穴内に学問的なメスが入れられることを期待しつつ稿をとじることにする。

本稿を作成するにあたって、明刀錢発見者のDave D. Davenport 氏と紹介者の西銘悦子氏、伊藤勝一氏には、多忙のところわざわざ現地まで行って発見時の状況を教えていただくとともに、資料の提供をいただきました。また、高宮廣衛、嵩元政秀、上村俊雄の諸先生方には明刀錢についていろいろと教えていただきました。本稿については先生方の御論文におうところが大きい。なお、城岳貝塚出土の明刀錢の使用については、東京大学文学部考古学研究室のご承諾を得ることができました。紙面をかりて感謝申し上げます。

註

- 註1 『BATTLE OKINAWA MUSEUM』という。浦添市字城間間のキンブキンザー内の兵舎の中にある戦争に関する小さな博物館。
- 註2 発掘した際、標品にはかなりの石灰分が付着していたとのこと。また、字らしいのが見えるということで裏面を擦ったということである。
- 註3 この石灰分の付着は、洞穴内から出土したという証拠となる。
- 註4 『具志頭村の遺跡』具志頭村教育委員会 1986年3月。
- 註5 『具志頭村史』具志頭村史発刊委員会 1961年6月。
- 註6 この一帯の洞穴のほとんどが日本軍の陣地壕として使用されていて、洞穴の中にはその当時の遺構が残されている。
- 註7 沖縄戦の際の遺構を後世になって墓として利用したのか定かでない。このように洞穴内に墓があるのはめずらしい。
- 註8 前掲書5
- 註9 前掲書4
- 註10 前掲書4
- 註11 前掲書4
- 註12 前掲書4
- 註13 関野雄「明刀錢」『日本考古学辞典』日本考古学協会編 東京堂出版 1962年。
- 註14 金関恕「刀貨」『世界考古学体系』第6巻 平凡社 1958年。
- 註15 前掲書14
- 註16 高橋建自「太古に於ける支那文化の伝来」『古墳と古代文化』雄山閣 1922年。
- 註17 関野雄「漢初の文化における戦国的要素について」『中国考古学研究』東京大学出版会 1956年。
- 註18 李進熙「戦後の朝鮮考古学の発展－初期金属文化期－」『考古学雑誌』第45巻第1号 1959年。
- 註19 西谷正「朝鮮におけるいわゆる土壙墓と初期金属について」『考古学研究』第13巻第2号 1966年。
- 註20 高宮廣衛「城嶽と明刀錢」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念論集同朋社出版 1987年。
- 註21 小田富士男・韓炳三編『日韓交渉の考古学 弥生時代編』六興出版 1991年。
- 註22 上村俊雄「沖縄出土の明刀錢について」『鹿大史学』第39号 1991年。

- 註23 城岳貝塚出土の明刀錢以外に、佐賀県唐津市と広島県三原市でも出土したと伝えられているが、その状況がはっきりしない。また、日比野丈夫氏は『新版考古学講座第9巻特論<中>』の「古錢」の項で、「もちろん明刀は日本内地で発掘されたことはない」と述べている。
- 註24 琉球王国展は、沖縄県立博物館主催で1992年10月27日～12月20日まで開催された。その時の図録が『琉球王国－大交易時代とグスク－』沖縄県立博物館 1992年として発刊されている。
- 註25 橋本増吉「沖縄県那覇市外城岳貝塚出土の明刀錢に就て」『史学』第7巻第2号 1928年。
- 註26 『那覇市の遺跡』那覇市教育委員会 1982年。
- 註27 小牧實繁「那覇市外城岳貝塚発掘報告」『人類学雑誌』第42巻第8号 1927年。
- 註28 前掲書25
- 註29 高宮廣衛「沖縄本島発見の明刀錢について」『第三回中琉歴史関係国際学術會議論文集』中琉文化経済協会 1991年。